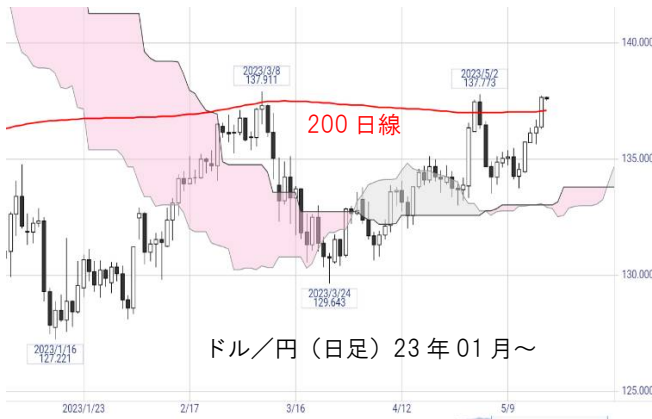


■ 目先はユーロ／ドルの調整が一巡するかどうかが焦点

昨日（17日）、ドル／円は5日続伸し、長めの陽線を描きながら137円台後半の水準まで再び上昇する動きとなった。足元では、ドル・インデックスが3月下旬以来の水準に値を



戻しており、ドルの強みが他に勝る状況となっている。

左図に見るとおり、ドル／円は200日移動平均線（200日線）を上抜ける動きを見せており、同線をクリアにブレイクすれば、当面の買い安心感は拡がりやすい。

さらに、週末の終値で31週移動平均線を上抜ける格好となれば、一段と強気の見方が拡がりやすくなるものと思われる。

確かに、市場がドルにとっての「イトコロ取り」をしているようなところはあるが、4月の鉱工業生産指数や住宅市場指数など、このところ発表された米経済指標のなかに米国経済の底力を感じさせるものが残っていることも事実ではある。

そのため、市場は米連邦準備理事会（FRB）が利上げを一旦停止する可能性が高いとの見方に傾きながらも、年内の利下げ開始については懐疑的なところもあり、なお米金利が高止まりを続けるようなら、とりあえずは「円やユーロとの金利差からドルは買い」との判断に結びつけているように見られる。

なにしろ、4月下旬に日銀金融政策決定会合の結果が判明してからというもの、日本の10年国債利回りは0.4%前後の水準に抑えられた状態が続いており、今のところは誰もが「円キャリー・トレードが活発化しやすい」と感じる状況となっている。

むろん、市場に一頃“暗雲”を漂わせていた米地銀の経営不安が一服したり、米債務上限引き上げ問題について楽観的に見る向きが増えていたりすることによって、リスク回避の円買いが巻き戻されている面もある。

一方、足元ではユーロも対ドルで弱含みの展開が続けている。今後、FRBが利上げを停止するに至った場合でも、欧州中央銀行（ECB）は、その後に幾度かの追加利上げを実施すると見られる。それにも拘わらず、5月9日あたりからユーロ／ドルが弱含みで推移しているのは、あくまで目先の調整局面と見れば良いのだろうか。

確かに、ユーロ／ドルが4月の半ばあたりから長らく挑戦していた1.10ドル処のクリア・ブレイクに失敗し、その失望感を伴って一旦売られたとの感はある。また、このところスペイン中銀総裁やギリシャ中銀総裁らが「ECBの利上げサイクルは最終段階」との見立てを示していることもユーロの上値を押さえる一因となっている模様である。

足元のユーロ／ドルが単に利益確定売りを伴う調整局面入りしているのなら、3月15日安値から4月26日高値までの上げに対する半値押しの水準にあたり、なおかつ89日移動平均線が位置してもいる1.08ドル処で目先底入れ&反発となる可能性も十分にあらう。

ユーロ／ドルが反発（＝ドル・インデックスが反落）してくれば、そろそろドル／円の上値が限られてきてもおかしくはない。3月8日の高値を目の前にして5月2日の上値が伸びきらず、一旦押し戻される格好となったことは記憶に新しい。一応は用心しておきたいところである。

（05月18日 10:00）